

総選挙結果をどう読むか(続続)

選挙結果を考えていると、なんだかゾクゾクしてくる。「大義なき解散・総選挙」に多くのメディアも疑問の声をあげたが、選挙前に発売された雑誌『世界』2015年1月号で、経済評論家の内橋克人さんが厳しく問題を指摘していた。最初のところを詳しく紹介しよう。

解散に臨んで安倍晋三首相は「この解散はアベノミクス解散」だと定義づけ、来る選挙の争点は自らの「経済政策」の是非を問うことのほかにないと絞り込んだ。その昔、サッチャー英首相の常套句“TINA”(「ほかに選択肢はない」=There is no Alternative)に真似て「この道しかない」とくり返した。いうまでもない。私たちは、安倍政権評価の物差しを「アベノミクス」なる経済政策の成否の一点に絞るような「愚行」に誘い込まれてはならない。安倍首相自ら世界に吹聴して歩いたアベノミクスは、同政権のなした「全体」ではなく、ごく些末な一部に過ぎない。その些末な一部でさえ時代錯誤の、しかし、壮大な「フィクション(虚構)」であったことが露呈し始めた。



それと知らず、安倍晋三氏は、今次選挙の争点をあえて経済政策の領域に絞り込むことで、「官邸独裁」的手法をもって強行した歴史的誤謬、たとえば集団的自衛権容認、特定秘密保護法強行採決、原発再稼働、沖縄基地問題、その他、次から次への民意蹂躪、独断専横の記録を隠しおおすことができると思い込んでいる。自ら大成功とはやす「アベノミクスの壺」に投票者の一票一票を吸い尽くせば、一強多弱の優越をたやすく保持できるとする自己陶酔的錯覚である。安倍氏の勝手な思い込みと稚拙な企みにやすやすと嵌め込まれていいはずはない。消費税増税の延期措置も国民生活への配慮などではない。アベノミクスの虚構性が生み出す酷薄な副作用、矛盾の辻褃合わせに過ぎない。自らが争点とした経済政策が「国策フィクション」に終わりつつある事実、いまだ一

国の宰相が気づかずにいる。

内橋さんらしい鋭い指摘だ。さて今回の選挙は安倍氏の勝手な思い込みと稚拙な企みに国民は嵌め込まれたのか。いろいろな角度から検証していく必要がある。右は朝日新聞の出口調査分析である(16日)。アベノミクス成功が26%と、失敗の29%を下回った。比例区でアベノミクスを成功と思う人の6割、失敗と思う人の1割が自民党に投票した。地域別では、郡部、中小都市、大都市の順となっている。失敗という人では、民主・共産に投票した人が多い。アベノミクスのゆくえに注目していきたい。



(2014年12月19日)